

サヨナラ イクメン。

脱・ブーム宣言

☆ 1

「パワーケー」会社も家庭も社会的活動も。どれも諦めない新しい働き方

自ら始めたばかりの実践を、川添祐樹さん(35)。福岡市はこう呼ぶ。

人材育成などを手掛けるナレッジネットワーク(同)

市)社員。片や昨年5月、子育て中の父親を支援するNPO法人「ファザーリング・ジャパン」に出会い、九州支部の一員に。読み聞かせなどを通じ、育児支援を本業にしたいと思はれた。ついに半年後、「辞めたい」と会社に告げる。

常日ごろから「父親」への渴望があった。終電で帰る毎日。6歳と2歳の娘、そして妻と過ごす時間はわずかだ。会社人か父親か。突きつけられた「私は一度きりの人生をどう生きるか」という問い合わせだった。

周囲を見回すと、社員9人がとがめたわけでもないのに「子どもの話、育児支

援の活動は何となく後ろめたかった」。同僚の前では口を閉じた。明かせば、本業だけ頑張つていればいいと言われそうな気がして。

だから、社長の反応は意外だった。「つともやればいい。どんな働き方なら可能なのか、具体的に提案

する環境があればいい。すぐさま「道具」を用意した。社員全員にスマートフォンを配布。インターネット上で日程や資料を共有する「クラウドコンピューティング」も使い、業務効率化をぐっと進めた。経営者として優秀な人材は手放したくない。加えて社会的な活動へ参加するのには「リーダーシップや新しい人脈が得られる」。社員研修」と位置付ける。優秀な社員を育てるチャンスと

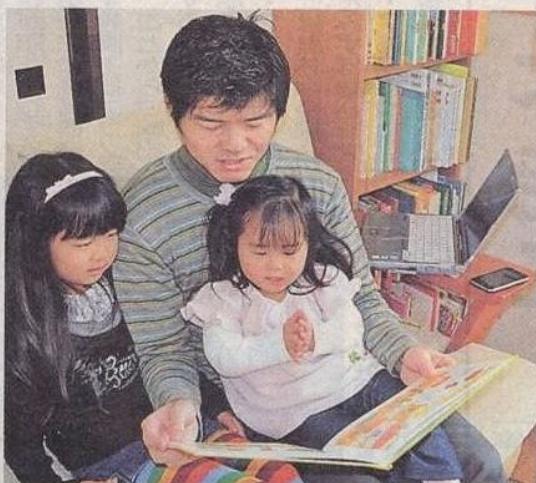
大企業に比べ、中小企業は育児支援の制度が整わないとされてきた。「柔軟な働き方ができるのは、むしろ中小企業やベンチャー企業」。社長は確信する。

伊な仕事をしてくれるはず」。ならば連続8時間、社内に拘束しなくていい。育児をしていてふと、ひらめく。その瞬間、仕事ができる環境があればいい。

考えるべきだと。



「パパワーク」提唱



2人の娘と絵本を読む川添さん。手元にはスマートフォンとノートパソコンが欠かせない

してほしい」。身分は正社員のまま、ITを使って時間と場所に縛られない働き方を目指すことになった。

社長、森戸裕一さん(43)の頭にあつたのは、子育て支援ではなく、社員と会社の双方に利点がある「次世代型ワークスタイル」への

春には新しい働き方を提案する「パワーケー研究所」を設立し、セミナーや情報発信を始めようと企画を練っている。もちろん自らの実践が、教材の一つだ。

育児に積極的な男性を指すイクメンが昨年、流行語になりました。ただ、ファシショナブルなイメージが先行した感も否めません。ブームにいち早くサヨナラし、『眞のイクメン』を目指すべく、一步先に踏みだそうとしている人たちを訪ねました。(畠中知子)

生 活

FAX 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp